

## 《シンポジウム記録》

## シンポジウム：近代日本の都市と大学

## —創設期大阪市立大学と恒藤恭—

大阪市立大学大学史資料室と恒藤記念室は、2009年から連続シンポジウムを開催しているが、以下は、その第3回目のシンポジウム記録である（旧「都市問題研究」としては第2回）。タイトルは「近代日本の都市と大学——創設期大阪市立大学と恒藤恭——」、2011年12月3日（土）、大阪市立大学学術情報総合センター文化交流室で開催された。内容は次の通りである。

基調講演 「近代日本における大学と『地域』『都市』——情報と模索をたどる試み——」

寺崎昌男（立教学院本部調査役、東京大学・桜美林大学名誉教授）

報告 「新制大阪市立大学の成立——専門学校から総合大学へ——」

大島真理夫（本学大学史資料室長、経済学研究科教授）

「恒藤恭の文化論・都市論・教養論——都市が大学を持つ理由を考えるために——」

飯吉弘子（本学大学教育研究センター准教授）

総括コメント 広川禎秀（本学名誉教授・恒藤記念室特任教授）

司会 桐山孝信（本学副学長）

村田正博（本学文学研究科教授）

連続シンポジウム第1回（2009年）は「恒藤恭と芥川龍之介——時代と対峙した二つの知性——」と題し、1910年の一高入学から始まる恒藤と芥川の深い交流と思想形成に焦点をあてた。芥川書簡の特別展示も同時開催した。第2回（2010年）は「恒藤恭の思想と学問の発展——文学青年から社会学者へ——」というテーマで、1921年に発表された「世界民」論文（恒藤恭「世界民の愉悦と悲哀」『改造』1921年6月号）を中心として、恒藤の社会学者としての自己形成のあり方にせまった。続く第3回は、1930～40年代へと進み、京大滝川事件から戦中・戦後という時代における恒藤の学問や思想に焦点を当てる予定であったが、講師の都合などから、本来であれば最終回に予定していた、大阪市立大学の大学史と恒藤の関連を取り上げた。日本の大学史の中では、大学と地域・都市という視点はかなり新しいものであるという寺崎講演を基調として、本学の大学史と恒藤研究の立場からの2報告を組み合わせた。歴史を振り返ると、都市が大学を持つ理由は決して自明ではないのであり、大阪市の例はきわめて先駆的であったことが理解される。そして、恒藤はその大学で学長という重責を担ったのである。